

短大特任教員教育研究業績書

平成 30年 5月 7日

氏名	ふりがな	所属	職位	性別
國盛 麻衣佳	くにもり まいか	保育学科 通信教育課程	教授・准教授・ 講師 助教	男・ 女

担当科目名

造形表現Ⅰ・Ⅱ

学歴

和暦(西暦)年 月	事項	学位
平成16(西暦2004)年4月	女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻コース入学	
平成20(西暦2008)年3月	女子美術大学芸術学部絵画学科洋画専攻コース卒業	学士(芸術) (第16674号)
平成20(西暦2008)年4月	東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻入学	修士(美術) (第6544号)
平成22(西暦2010)年3月	東京藝術大学大学院美術研究科修士課程絵画専攻修了	
平成22(西暦2010)年4月	九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻博士課程 環境・遺産デザインコース入学	
平成29(西暦2017)年3月	九州大学大学院芸術工学府芸術工学専攻博士課程 環境・遺産デザインコース修了	博士(芸術工学) (芸博甲第214号)

教育歴・職歴

名称	期間	教育内容又は業務内容
福岡女学院大学人文学部 メディア・コミュニケーション学科非常勤講師	平成26(西暦2014)年4月～現在に至る	学部生対象「視覚コミュニケーション論」「デジタル表示論」講義
田川市石炭・歴史博物館 「まち歩きガイド養成講座」 アドバイザー	平成26(西暦2014)年9月～平成27(2015)年3月	市民によるまち歩きガイドの育成およびまち歩きマップ作成 アドバイザー
小田原短期大学	平成29(西暦2017)年4月～現在に至る	保育学科通信教育課程 講師

所属学会等

名称	活動期間	活動内容(役職等の活動を含む)
文化政策学会	平成22(西暦2010)年4月～(現在に至る)	会員
文化経済学会	平成22(西暦2010)年4月～(現在に至る)	会員
九州産業技術史研究会	平成26(西暦2014)年4月～(現在に至る)	平成26(西暦2014)年4月～平成27(西暦2015)年3月迄 事務局
文化資源学会	平成27(西暦2015)年4月～(現在に至る)	会員
九州大学芸術文化環境学会	平成26(西暦2014)年4月～(現在に至る)	会員
アジア美術家連盟	平成27(西暦2016)年4月～(現在に至る)	会員

社会活動等

名称	活動期間	活動内容
----	------	------

金沢アートプラットホーム 2008 「Z project」 金沢 21 世紀美術館 Z アンデパンダン展 サポートスタッフ	平成 20 (西暦 2008) 年 10 月	美術家 中村政人氏が主宰する市民参加型の美術展「Z アンデパンダン展」は、美術の敷居を払い多様な交流を生み出す企画であった。筆者は設営及び展示作業、会場スタッフ、イベントスタッフを務めた。 主催：金沢 21 世紀美術館
金沢アートプラットホーム 2008 「Z project」アートセンターkapo サポートスタッフ	平成 20 (西暦 2008) 年 10 月	美術家 中村政人氏が、金沢兼六通りにある空き店舗をアートセンターとして再生するプロジェクトのサポートスタッフを務めた。清掃や設営、オープニングライブ&パーティー、トークイベント、レンタルアートシステム構築、カフェスタッフなど、オープニングに必要な諸々の役割を務めた。 主催：金沢 21 世紀美術館
山口県秋吉台国際芸術村 アーティストインレジデンスサポートスタッフ	平成 21 (西暦 2009) 年 1 月～2 月	アーティスト・イン・レジデンス「trails 2008-2009」では、国内外から招聘された 3 名のアーティストが滞在。筆者はタイ人アーティストのジャクラワル氏のサポートを務めた。映像制作全般やプロジェクトアーカイブの作成に携わった。キュレーター原真知子氏へのインタビューや関係者インタビュー等、リサーチを兼ねた参加を行い、リサーチ結果は 2010 年に東京藝術大学壁画第一研究室主催の「Art Project Studies」展にて展示された。
NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ正会員	平成 22 (西暦 2010) 年 4 月～ (現在に至る)	福岡県大牟田市・熊本県荒尾市一体の旧三井三池炭鉱関連資産を中心とした地域の遺産保存活用運動とまちづくり活動を行う。平成 29 年 (西暦 2017 年) より通信の作成・発行を担当。
NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団賛助会員	平成 22 (西暦 2010) 年 4 月～ (現在に至る)	北海道空知地方における鉱関連資産を中心とした地域の遺産保存活用運動とまちづくり活動を行う団体の賛助会員。平成 22 (西暦 2010) 年には同団体マネジメントセンターにて個展開催。
瀬戸内国際芸術祭こえびスタッフ	平成 22 (西暦 2010) 年 10 月	瀬戸内国際芸術祭のボランティアスタッフとして現地滞在し参画した。
文化財保存計画協会 国指定重要文化財 万田坑工具再配置作業スタッフ	平成 22 (西暦 2010) 年 8 月	旧三井三池炭鉱の関連施設であり、国指定重要文化財および史跡となった万田坑跡に隣接する職場の工具類の手入れと再配置を文化財保存計画協会の指導のもと行った。
九州大学社会連携事業採択プログラム 天草・高浜フィールドワーク・デザインワークショップ事務局スタッフ	平成 23 (西暦 2011) 年 5 月～2014 年 3 月	熊本県天草市高浜地区をフィールドに、大学、企業、国内外の参加者と地域社会が連携し、地域再生デザインに関する実証研究とデザイン提案を行う合宿型デザインワークショップの事務局スタッフを務めた。2013 年には東京報告会が内田洋行本社にて開催。報告発表、パネリストとして登壇。 主催：九州大学大学院教授藤原恵洋＋九州大学大学院芸術工学研究院環境デザイン部門芸術文化環境論藤原恵洋研究室
荒尾市役所産業振興課荒尾市中国人留学生モニターツアー日本人サポートスタッフ	平成 23 (西暦 2011) 年 8 月～9 月	九州大学大学院に在籍する中国人留学生と荒尾市観光課の連携により、辛亥革命を支援した宮崎滔天と孫文の交流を振り返り、中国、台湾、日本の交流を促す観光産業の開発のサポートスタッフを務めた。
九州大学大学院芸術工学府学「環境・遺産デザイン特別演習」ネパール国カトマンズ市における芸術文化環境調査	平成 23 (西暦 2011) 年 11 月	2011 年福岡アジア文化賞芸術文化賞受賞者のドイツ人保存建築家、N. グッチョウ博士は、1930 年代の地震によって倒壊したカトマンズ・バクタブルの寺院の保存修復および復元に尽力した。その記念式典への参列と、世界文化遺産登録をはじめ保存修復を展開してきた経緯に関する踏査を、グッチョウ博士、九州大学藤原恵洋教授はじめ建築士、ランドスケープデザイナーらと実施。

文化経済学会（日本）2012 熊本大会実行委員会事務局 メンバー	平成24（西暦2012）年3 月～11月	11月24、25日の文化経済学会（日本）2012熊本大会開催に伴う 実行委員会。熊本市内を中心に、10回以上リサーチおよび会議を 行い、大会プログラムの企画立案が行われた。筆者は会議への参 加と議事録、ファシリテーショングラフィック、リサーチ、当日 スタッフを務めた。
九州大学大学院芸術工学 研究院環境デザイン部門 芸術文化環境論講座天草 フィールドワーク牛深ハイ ヤ祭り参与調査事務局 スタッフ	平成24（西暦2012）年3 月～2015年6月	熊本県天草市における地域文化資源調査フィールドワーク及び国 重要無形文化財牛深ハイヤ祭りへ参与調査を行った。九州大学大 学院芸術工学部および芸術工学部の学生、交換留学生らが窯元 丸 尾焼が主宰する「丸尾會」のメンバーとして参画。筆者は幹事、 運営、事務局と報告書等を担当した。
荒尾市役所産業振興課× 九州大学C&C 中国人留 学生モニターツアー日本人 サポータースタッフ	平成24（西暦2012）年 8月～9月	九州大学大学に在籍する中国人留学生と荒尾市観光課の連携によ り、「孫文・宮崎滔天の絆再生留学生モニターツアー」が開催。 辛亥革命を支援した宮崎滔天と孫文の交流を振り返り、中国、台 湾、日本の交流を促す観光産業の開発のサポートスタッフを務め た。
三池炭鉱掘り出し隊 「大 牟田 香の風景 ～ふるさ との香り作り～」商品開発 プロダクトデザイン	平成24（西暦2012）年12 月～平成25（西暦2013） 年1月	福岡県共助社会づくり事業 平成24年度新しい公共の場づくり のためのモデル事業のいっかんとして、N's アロマオフィス 北尾菜保子氏と誠修高校・ありあけ新世高校の学生によって大牟 田の心象風景をイメージした香りをサシェとして商品開発。筆者 は2種類のパッケージデザインを手がけた。
荒尾市万田坑保存管理計 画策定委員会オブザーバ ー	平成24（西暦2012）年1 月～12月	国指定重要文化財および国指定史跡である熊本県荒尾市の万田坑 の保存管理計画策定委員会にオブザーバーとして出席。荒尾市役 所および三池炭鉱関連資産周辺にて、調査と議論がなされた。筆 者による記録はしばしば文化財保存計画協会と共有され、資料作 成に寄与した。
第五回福岡県東区安全安 心マップづくりワークシ ョップ ファシリテーシ ョンサポーター	平成25（西暦2013）年9 月	コンコード環境デザイン研究所主催による東区の安全安心マップ づくりワークショップが市民参加型で開催。防犯・防災・交通安 全面を重視したマップ作成のファシリテーションサポーターとし て参加。
赤煉瓦ネットワーク全国 大会関門大会 サポートス タッフ	平成25（西暦2013）年11 月	1991年に発足した赤煉瓦建築の保存活用団体による赤煉瓦建築の 保存再生活用に関する研究と交流会において、事前準備及び当日 のサポートスタッフを務めた。
静岡芸術文化大学「文化施 設・実演芸術団体のための アートマネジメント実践 ゼミナール～中長期の計 画策定を通じたアートマ ネジメント人材育成～」サ ポートスタッフ	平成26（西暦2014）年2 月	平成25年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の採択 を受けた静岡文化芸術大学「文化施設・実演芸術団体のためのア ートマネジメント実践ゼミナール～中長期の計画策定を通じたア ートマネジメント人材育成～」のサポートスタッフをアクロス福 岡での開催時に務めた。
第14回菊池文化資源講演 会 菊池文化資源総合調 査研究の総括シンポジウ ム「矜持感情を誘発する対 話型まちづくり」パネリス ト	平成26（西暦2014）年2 月	2011年～2014年にかけて、九州大学大学院芸術工学部藤原恵洋研 究室によって行われた菊池文化資源総合調査研究の総括がシンポ ジウム形式で開催。筆者は「矜持感情を誘発する対話型まちづく り」と題して調査研究の成果および考察を述べた。

九州大学社会連携事業採 択プログラム 天草・下浦フィールドワー ク・デザインワークショップ 事務局スタッフ	平成 26 (西暦 2014) 年 6 月～平成 28 (西暦 2016) 年 11 月	熊本県天草市下浦地区をフィールドに、大学、企業、国内外の参 加者と地域社会が連携し、地域再生へ取り組む合宿型デザインワ ークショップの事務局スタッフを務めた。同地における歴史的な 石工技術集団の足跡や農業、漁業といった産業や様々な文化資源 を生かした取り組みを継続的に生み出す機会が創出された。 主催：九州大学大学院教授藤原恵洋＋九州大学大学院芸術工学研 究院環境デザイン部門芸術文化環境論藤原恵洋研究室
国立療養所菊池恵楓園絵 画クラブ「金曜会」の絵画 保存活動参画	平成 28 (西暦 2016) 年 2 月～ (現在に至る)	一般社団法人ヒューマンライツふくおかは、ハンセン病療養施設 国立療養所菊池恵楓園絵画クラブ「金曜会」の絵画保存活動を行 っている。絵画の記録、保存、再評価に関する取り組みに参加。
平成 28 年度・平成 29 年度 小代焼窯元の会 需要開 拓事業サポートスタッフ	平成 28 (西暦 2016) 年 7 月～10 月 平成 29 (西暦 2017) 年 7 月～10 月	熊本県荒尾市を中心に、近隣の 2 市 3 町に点在する国指定伝統的 工芸品の小代焼は約 400 年の伝統を持つ。小代焼の周知と熊本地 震による被害の復興を目的とした展示会に向けてのリサーチ・会 議・企画といった運営のサポートスタッフを務めた。

担当教科目に関する資格・免許等

名 称	取得年月	取 得 機 関
中学校教諭一種免許 (美 術)	2008 年 3 月	神奈川県教育委員会
高等学校教諭一種免許 (美術)	2008 年 3 月	神奈川県教育委員会

研究実績に関する事項

代表的な著書、論 文等の名称	単 著 共 著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑 誌又は発表学会 等の名称	概 要
(著書) 「三池と美術 -激 動に触発された表 現者たち-」	単著 (寄 稿)	平成 30 (西暦 2018) 年 6 月	『炭都と文化- 昭和 30 年代の 三池・大牟田-』 炭都と文化研究 会	戦前期から 1990 年代初頭まで全国一の炭鉱であった三井 三池炭田における、石炭産業と美術活動の関係性を明らか にした。時代や地域と対峙した表現活動を振り返ること で、当時の人々が表現に込めた心境、思想、意図を明らか にすることを目的とした。近代化産業の発展と衰退に伴う 芸術文化活動に対する考察において、まだ十分には明らか にされていない三池の美術分野に着目し、その特異性を明 らかにした。
(学術論文) 「石炭顔料 COAL PAINT を用いた旧 産炭地におけるア ートプロジェクト の実践と評価に関 する研究」	単著	平成 25 (西暦 2013) 年 3 月	『文化資源学 11 号 (特集 地 域社会と文化資 源』 文化資源学会出 版、 第 11 号、 pp. 45-50.	筆者が 2007 年より旧産炭地をフィールドに、地域固有資 源を生かしたアートプロジェクトの実践と評価を行った。 独自に開発した石炭顔料を用いた表現が、炭鉱に対する 「負の遺産」いうイメージを解消するきっかけとなり、次 世代への歴史の継承や、創造的な活動の誘発、あるいは地 域に対する矜持や愛着の醸成に寄与することが明らかと なった。

「旧産炭地における炭鉱を文化資源としたアートプロジェクト-石炭・石炭灰顔料 COAL PAINT を用いたアートプロジェクトと先行事例の比較研究-」	単著	平成 24 (西暦 2012) 年 11 月	『九州大学芸術工学紀要 Vol. 17.』九州大学芸術工学府出版、第 17 号、pp. 111-134.	旧産炭地において、地域の課題を再検証し、歴史を受け継ぐアートプロジェクトが 1990 年代より全国各地で行われている。本研究では、先行事例と、筆者が 2007 年より行なっている石炭や石炭灰を原料としたアートプロジェクトを含めて評価考察することで、同じ社会的背景を持つ地域における芸術文化活動の意義を、アートプロジェクトの側面から明らかにした。
「旧産炭地の形成と再生に関わる芸術文化創造活動の意義に関する研究」	単著	平成 25 (西暦 2013) 年 3 月	『文化政策研究』、日本文化政策学会出版、第 7 号、pp. 197-206.	地域再生が急務とされる旧産炭地においては、地域住民が地域アイデンティティを再建し、誇りや愛着を醸成する機会が求められている。これらに寄与する芸術文化活動について、1990 年代以降の国内外の事例からその意義を明らかにした。
「わが国の産炭地における美術活動の展開と意義-目黒区美術館「文化資源としての炭鉱展」を契機として-」	共著 (共著者 藤原 恵洋)	平成 28 (西暦 2016) 年 11 月	『九州大学芸術工学紀要』九州大学芸術工学府出版、第 25 号、pp. 23-40.	産炭地における美術活動の意義を、美術的評価に留まらない社会的評価である文化資源という観点から考察した。産炭地という近代化の過程の中で、厳しい社会的背景によって労働者らが生み出さざるを得なかった表現行為を中心に、産業と美術表現の関係性を明らかにした。筑豊、北海道、三池、常磐という 4 つの炭田を取り上げ、各々の産炭地で見られた美術活動を具体的な作家及び作品を元に、その地域固有性や相違を明らかにした。
「炭鉱と美術-旧産炭地固有の美術活動の成立と展開に関する研究-」	単著	平成 29 (西暦 2017) 年 3 月	九州大学 博士学位論文	幕末明治以降に発展したわが国の主要産炭地で、戦後を中心に活発化した美術活動の成立過程と、1950 年代後半よりエネルギー転換によって衰退した同地に生まれたアートプロジェクトの展開と意義を明らかにした。近年形成されつつあるアートプロジェクト史は、美術の表現領域の拡張に則した体系的なものが多くを占める。しかし本研究においては、近代炭鉱都市という共通する社会的背景を持ったフィールドに焦点を当て、発展と衰退という社会変化に呼応するようにして生まれた美術活動の変遷と意義、地域固有性を明らかにした。
(研究発表) 口頭発表 「炭鉱を歴史的な文化資源とした芸術創造による旧産炭地再生計画」	単著	平成 23 (西暦 2011) 年 11 月	日本文化政策学会 早稲田大学	衰退が進む旧産炭地は全国各地に点在し、1990 年代以降には同地に残る様々な遺産を文化資源として活用する取り組みが生まれてきた。一方で 90 年代以降興隆したアートプロジェクトにおいては、旧産炭地同士の連携や課題の共有や往来といった動きは乏しい。本論では、共通する産業や歴史を持つ芸術表現の交流と連帯の必要性、矜持の醸成による地域再生の可能性を述べた。
口頭発表 「旧産炭地における炭鉱を文化資源としたアートプロジェクト-石炭・石炭灰 COAL PAINT を用いたアートプロジェクト実践による旧産炭地住民の矜持再生-」	単著	平成 24 (西暦 2012) 年 11 月	文化経済学会<日本> 熊本大学	産業転換によって著しく衰退する旧産炭地において、地域の矜持再生は不可欠である。同地の文化資源を活用した都市政策やアートプロジェクトは 1990 年代より国内外で行われており、その評価検証や体系化が求められる。本研究では、国内外の先行事例と、筆者が 2007 年より行なっている石炭や石炭灰を原料としたアートプロジェクトの評価検証を通して、シビックプライドの醸成と芸術文化活動の関係性を考察した。
ポスターセッション 「石炭顔料 COAL PAINT を用いた旧産炭地におけるアートプロジェクト」	単著	平成 25 (西暦 2013) 年 3 月	日本文化政策学会 鳥取大学	戦後の旧産炭地においては、産業転換に伴う衰退の中で、自らの地を変革するような芸術運動が様々な分野より行われてきた。これらは今日におけるアートプロジェクトと共通点も見受けられ、戦後の芸術運動を再考察することは、地域における文化の意義を明らかにすると考えられる。筆者による石炭を顔料とした COAL PAINT を用いた活

の実践と評価に関する研究」				動を、戦後同地における芸術文化活動から今日のアートプロジェクト史と関係付け、地域に寄与する可能性を持つと論じた。
口頭発表 「戦後産炭地における芸術文化運動と風土の関係性に関する研究 -三井三池炭鉱を中心に-」	単著	平成 25 (西暦 2013) 年 12 月	日本文化政策学会 青山学院女子短期大学	産炭地における市民中心の芸術文化活動は、操業時より盛んに創出され、戦後は社会運動や労働運動、芸術運動といった政治性と結び付きながら発展したものも少なくない。しかし、三井三池炭田における美術活動は、十分に明らかにされてこなかった。本研究では発掘を行うと共に、戦後最大の労働争議、三池争議がもたらした影響を考察した。
講演 「<空知旧産炭地域における「炭鉱の記憶」をキーワードにした地域再生のためのアートマネジメント人材育成事業>」	単著	平成 26 (西暦 2014) 年 5 月	九州大学芸術文化環境学会 九州大学	旧産炭地における固有資源を活用した、2つの参加型のアートプロジェクトに対する参与調査の報告と評価検証に関する講演を行った。NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団「炭鉱の記憶アートプロジェクト」と、川俣正氏の「三笠プロジェクト」の関係者インタビューや参加者アンケートの分析から、双方のプロジェクトの特徴や差異、共通点を明らかにした。
講演 「炭鉱を見つめた美術家の制作背景に関する考察」	単著	平成 26 (西暦 2014) 年 7 月	九州産業技術史研究会 九州大学	産炭地における文化活動の成立過程を明らかにするべく、戦前から 1990 年まで全国一の炭鉱であった、三井三池炭鉱の職場サークル等の文化活動の普及と変遷に着目。活発な人材の流出と交流がある一方、職場サークルには労働の階級性が反映されていた。しかし斜陽化に伴い階級を越えた繋がりが創出され、その一部は現在も地域の芸術文化活動振興の一翼を担っていることが明らかとなった。
口頭発表 「炭鉱を見つめた美術家の制作背景に関する考察」	単著	平成 26 (西暦 2014) 年 10 月	文化資源学会 東京大学	2009 年目黒区美術館「‘文化’資源としての<炭鉱>展」では、国内の各産炭地を捉えた視覚芸術を集約し、文化資源という視点から価値付けた。本論においては、同展の視点を敷衍し、研究対象とされてこなかった三池の美術活動の変遷を明らかにした。また、先行事例を踏まえて各地域間や炭鉱の職種別によって異なる制作背景や表現を比較検証し、各固有性を明らかにした。
口頭発表 「旧産炭地には独自の芸術文化活動が根付いたのか? ~旧産炭地の労務管理体制や人材流動化がもたらした創造人材による芸術文化環境形成に関する研究~」	単著	平成 27 (西暦 2015) 年 7 月	文化経済学会<日本> 駒澤大学	近代以降成立した産炭地と炭鉱労働は、従来の土着的かつ封建的な農村共同体の構成員とは異なる流動的人材によって独自の文化的風土が生み出された。過酷な労働を克服するための相互支援や互助・共助関係が、社会性や政治性を獲得し、また包摂的な芸術文化運動へと昇華されたと考えられる。本研究では、特に芸術文化運動に注目し、現地調査や文献史料の分析から、労務管理体制や人材流動化がもたらした創造人材による芸術文化環境形成過程を考察した。
講演 「旧産炭地の芸術文化環境の形成と展開に関する研究」	単著	平成 27 (西暦 2015) 年 11 月	九州産業技術史研究会 九州大学	炭鉱を主題とした芸術文化は操業時より盛んに創出され、それらは近年各地で興隆するアートプロジェクト形成にも影響を与えてきた。1950 年代に発足した芸術集団 九州派、1961 年に始まった山口県宇部市「現代日本彫刻展」といったアートプロジェクト前史から、黎明期に貢献したアーティストの川俣正、安田侃、閉山後の旧産炭地で生まれたアートプロジェクト等を事例に、炭鉱を文化資源とした芸術文化創造の意義を考察した。
講演 「炭鉱と美術~旧産炭地固有の美術活動の成立と展開~」	単著	平成 29 (西暦 2017) 年 1 月	九州産業技術史研究会 九州大学	近代炭鉱都市において、その独特の都市形成過程に呼応するように生まれた美術表現に着目し、労働と表現の関係性やその意義を、生存関係者インタビューをはじめとする実証資料を新たに紹介した。旧産炭地が形成した芸術文化活動の重層性と独創性に着目し、そこから今後の地域再生へ貢献しうる芸術文化活動の意義を考察した。

口頭発表 「三井三池鉱山に 従事した与論島民 の文化活動に関する研究」	単著	平成 29 (西暦 2017) 年 9 月	第 11 回 日本文 化政策学会 北海道大学	衰退が著しい旧産炭地において、都市形成過程の中で生まれた文化活動の足跡を明らかにすることは、労働と芸術の関係性、移住者が集う炭鉱都市で文化が果たした役割が明らかになると言え、今後の地域における文化の意義を考える上で必要と言える。本研究では、戦前から 1990 年代初頭まで国内最大の炭鉱であった三井三池炭鉱で、明治期以降厳しい港湾作業に従事した与論島民の文化活動の足跡を明らかにした。
口頭発表 「炭鉱と美術～旧 産炭地固有の美術 活動の成立と展開 に関する研究～」	単著	平成 29 (西暦 2017) 年 12 月 9 日	第 7 回博士号取 得者研究発表会 文化資源学会 東京大学	博士学位論文「炭鉱と美術～旧産炭地固有の美術活動の成立と展開に関する研究～」に基づく発表を行った。会場では、研究過程で制作した作品「Coalmine Portrait」を 4 点展示した。
(その他) (特別講師) 「芸術文化環境 論」特別講師	単	平成 22 (西暦 2010) 6 月	九州大学大学院 芸術工学部	藤原恵洋教授による学部生対象の「芸術文化環境論」は、具体的な地域社会を対象とし、固有の文化資源の再発掘と、活用策のデザイン提案を芸術文化活動の側面から行うものであった。筆者の特別講義では、国内外の旧産炭地におけるアートプロジェクトや地域再生型のアートフェスティバルを先行事例に挙げ、また筆者による実践例を挙げ、芸術文化の社会的有用性を説いた。
「表現演習」 特別講師	単	平成 23 (西暦 2011) 年 3 月	女子美術大学 絵画学科洋画科	大森悟教授による学部生 2～4 年生を対象とした「表現演習」にて講義を行った。表現を追求する学生に対して、個人の表現が社会性を獲得する過程や、その重要性を論じた。個人の関心やアイデアの着想、具体的なフィールド設定、文脈や社会性の獲得、素材や表現手法の追求を講義形式とワークショップ形式によって説いた。
「芸術・文化環境 論」特別講師	単	平成 23 (西暦 2011) 年 6 月	九州大学大学院 芸術工学部	藤原恵洋教授による大学院生対象の「芸術・文化環境論」は、地域再生が急務となる地方地域を対象に、その固有性の再発見と再評価、活用をデザイン提案を通して行うことを目的としている。筆者による特別講義では、近年地方地域において活発化するアートフェスティバル、アートプロジェクトを事例に、その社会的意義を論じた。また筆者個人の活動経験を踏まえ、企画立案や展開方法等、実践に向けた観点からも論じた。
「表現演習」 特別講師	単	平成 24 (西暦 2012) 年 6 月	女子美術大学大 学院 美術学科芸術表 象専攻	杉田敦教授による大学院生を対象とした「表現演習」では、社会的な問題に対する芸術表現の関わりを様々な視点から考察するものであった。筆者による特別講義では、地方地域における社会変化が、表現者にどのような影響をもたらすのか。美術家を形成する環境や、表現の成立過程を様々な事例から考察するものとして、学生との対話形式での授業を行った。
「表現演習」 特別講師	単	平成 24 (西暦 2012) 年 11 月	女子美術大学 絵画学科洋画科	大森悟教授による学部生 2～4 年生を対象とした「表現演習」では、作品制作と社会性を獲得に関する講義を行った。学生個人の関心やアイデア、着想をもとに、具体的なフィールドの設定、文脈や社会との関連性、素材や表現手法の追求を、講義形式とワークショップ形式によって行った。
「クラフト・美術 特別講義」 特別講師	単	平成 25 (西暦 2013) 年 5 月	神戸芸術工科大 学 クラフト・美術 学科	谷口文保准教授による学部生対象授業「クラフト・美術特別講義」では、表現活動と社会的関係性の構築をテーマに、様々な表現者を招いて考察を深めることを目的としている。筆者による特別講義では、筆者の活動経験をもち、個人の制作が社会性を担保してゆく過程と、その社会的意義に関する考察を論じた。

「芸術文化環境論」特別講師	単	平成 25 (西暦 2013) 年 6 月	九州大学大学院 芸術工学部	藤原恵洋教授による学部生対象の「芸術文化環境論」では、具体的な地域社会を対象とし、固有の文化資源の再発掘と、活用策のデザイン提案を芸術文化活動の側面から行うことを目的としている。筆者の特別講義では、地方地域における課題と芸術文化が果たす役割を、表現者、参加者、地域住民といった視点から論じた。
(リサーチアシスタント・ティーチングアシスタント) 「環境・デザインプロジェクト演習 1」ティーチングアシスタント	単	平成 22 (西暦 2010) 年 4 月～8 月	九州大学大学院 芸術工学部 環境・遺産デザインコース	八女市黒木町における持続可能な創造的農村のまちづくりを具体的な事例とし、その手法を学び地域的特性を明らかにする調査研究のカリキュラムにおいて、履修生の授業サポート及び各回のまとめ、授業の組み立てサポート及び合宿調査の同行とサポートを行った。
「芸術・文化環境論」ティーチングアシスタント	単	平成 23 (西暦 2011) 年 4 月～8 月	九州大学大学院 芸術工学部 環境・遺産デザインコース	芸術文化による地域再生の先行事例を学ぶ各回の授業サポートを行った。また、九州各地のまちづくり事例、美術館、舞台への視察調査対象を含むフィールドワーク演習の組み立てと現地サポートを行った。
「芸術文化企画演習」ティーチングアシスタント	単	平成 23 (西暦 2011) 年 10 月～平成 25 (西暦 2013) 年 2 月	九州大学大学院 芸術工学部 環境・遺産デザインコース	芸術文化による地域再生の事例を学ぶとともに、履修生が具体的なフィールドを見つけ出し、グループワークによってリサーチとまちづくりの実践的提案を行った。授業内で、筆者は熊本県荒尾市の旧三井三池炭鉱の万田坑のガイド養成を担当。現地のまちづくり NPO との連携によって、市民ガイドの育成を促すガイドブック作成を履修生と共に、ガイド育成のカリキュラムを構築、実践した。
九州大学大学院 リサーチアシスタント	単	平成 24 (西暦 2012) 年 4 月～平成 25 (西暦 2013) 年 3 月	九州大学大学院 芸術工学部	指導教員によるリサーチテーマの補助研究者として、旧産炭地をフィールドとした芸術文化による都市再生に関する調査研究を行った。研究成果は学内授業、研究会、学会等で発表された。
「環境・デザインプロジェクト演習 3」ティーチングアシスタント	単	平成 24 (西暦 2012) 年 4 月～8 月	九州大学大学院 芸術工学部 環境・遺産デザインコース	東日本大震災後の被災地の状況、現状とその課題をコミュニティ、建築、文化財といった視点から調査研究を行うことを目的とした演習。筆者は履修生の震災や被災地に対する基礎的調査や授業各回のサポート、現地調査のスケジュール組み立て、同行、及び研究発表のサポートを行った。
全学部 1 年生授業 「芸術」ティーチングアシスタント	単	平成 25 (西暦 2013) 年 4 月～8 月	九州大学全学部	約 120 人の全学部一年生対象の、芸術と社会の関係性に関する授業のサポートを行った。各回の講義、演習、出席や成績評価におけるサポートの他、学外演習では、福岡県立美術館、福岡市立美術館、福岡アジア美術館の 3 館の運営美術館調査の同行や教材作成を行なった。
(製品・教材開発) 日本理化学工業 石炭チョーク 「COAL CHALK」	共同	平成 22 (西暦 2010) 年 6 月～10 月	北海道岩見沢市	北海道岩見沢市で炭鉱遺産の保存活用を行う NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団主催で、アーティストインレジデンスを実施。石炭産業の歴史を次世代へ継承するべく北海道産の石炭・石炭灰・廃棄物質(赤ズリ)から独自の画材を開発。北海道美唄市にある日本理化学工業の協力のもと、チョーク「COAL CHALK」を開発。素材は、石炭の黒、北海道電力から提供を受けた石炭灰を用いた灰色、赤ズリの煉瓦色の 3 色となった。幼児から大人が使える郷土色の強いものとなり、北海道岩見沢市百餅まつりでのアートワークショップや、炭鉱の記憶推進事業団マネジメントセンターでのワークショップ、北真小学校 4 年生を対象としたワークショップに用いた。 協力：日本理化学工業

福岡県共助社会づくり事業 「おおむたの色」クレヨン	共同	平成23（西暦2011）年6月～平成25（西暦2013）年3月	福岡県大牟田市	旧産炭地である福岡県大牟田市のイメージカラーを、市民参加型で炭鉱遺産から抽出し、産学連携によってクレヨンとして教材・製品開発した。2011年12月に開催した「炭鉱のまちな色を探そう三池炭鉱のクレヨンづくり」ワークショップでは、市内の中学生はじめ地元住民が中心となり、炭鉱遺産から独自の色が抽出された。150色を超える色相サンプルが収集され、黒（石炭）、白（三井J化学工場）、黄色（三池炭鉱のお月さま）、青（世界につながる三池港）、赤（今なお残る炭鉱電車）、茶（宮浦坑の煙突）の6色を作成。黒には石炭を顔料として用いた。2013年度より一般販売開始。クレヨンを用いた教育ワークショップを大牟田市内を中心に複数開催した。 主催：三池炭鉱掘り出し隊 協力：日本理化学工業、福岡県工業技術センター、東洋美術学校 ACTY
（研究活動等） コールマイン三笠アートプロデューサー養成講座「Coalmine Lab.」	共同	平成20（西暦2008）年7月	北海道三笠市 旧美園小学校	旧産炭地である北海道三笠市のモダンアートミュージアムにて、美術家 川俣正氏とクリエイター集団 Coalmine Lab.（メンバーとして参加）によって講座開講。芸術系大学及び専門学校生、全道の文化行政担当者、文化活動の制作担当者を対象にアートプロデューサーとなる人材を育成する講座を開講した。会場にはこれまでの作品や記録も展示された。 主催：北海道文化財団事業課
text book;展 作品「Coalmine Lab.」出展 ラウンドトーク「fool's basket」	個人 （グループ展 出展）	平成20（西暦2008）年7月～8月	東京都杉並区 女子美ギャラリー ガレリアニケ	キュレーター杉田敦を中心に、教育とアートという観点で開催された企画展。Coalmine Lab.の川俣正[通路]展における成果をデジタル映像および資料アーカイブとして収集し展示。トークディスカッション「fool's basket」7月29日・8月9日（土）17:00～自由参加型のラウンドテーブル型のトークイベントを開催。 主催：女子美ギャラリーガレリアニケ
ゼロダテアートプロジェクト アーティストインレジデンス「159 Coalmine Lab.」	個人 （アートプロジェクト 参加）	平成20（西暦2008）年8月～9月	秋田県大館市	美術家の中村政人が主導する秋田県大館市のアートプロジェクト「ゼロダテ」にアーティストインレジデンス参加。空き店舗を展覧会場にし、秋田の鉱山の歴史をテーマとした「159 Coalmine Lab.」を設置。会場壁面には県の鉱山分布図を石炭灰でペイント、現地リサーチの結果や、地域住民による関係資料を展示。9月6、7日は同会場で秋田産の石炭灰を画材としたワークショップ「フライアッシュペイントで大好きな人の似顔絵を描こう！」を開催し、3歳～大人までの約80人が参加。
アーティストインレジデンス Coalmine Lab. 「炭坑+アート展」	共同	平成20（西暦2008）年11月	山口県宇部市 新天町	山口県宇部市新天町商店街の空き店舗をサテライトラボ化しヶ月開所。メンバーは常時ラボに駐在し、調査研究、デジタル映像公開、資料展示、制作、ワークショップ、物産展出店、トークイベント等を開催。 主催：宇部市教育委員会
英国都市計画ワークショップ 「CityScapers cardiff chimera 2020 a porosity studio small city / big neighbourhoods」 招聘	個人 （ワークショップ 参加）	平成21（西暦2009）年3月～4月	英国ウェールズ カーディフ大 学・グラモーガン 大学	英国ウェールズ州カーディフ市は、18世紀に石炭産業や製鉄業で栄えたが、産業転換によって急速に衰退し、近年は地域再生が急務とされている。同市は、2020年に向けたカーディフの都市再生計画の提案を、7カ国の建築・デザイン・アートを専攻する大学生および院生を選抜招聘し、ワークショップ形式で地域再生の提案を募った。筆者はカーディフ炭のペイントを用いたインスタレーションと、都市を巡るツアーを企画立案した。 主催：英国国際交流機関（British Council）カーディフ大学・グラモーガン大学

「Artproject Studies」展	共同 (グループ展)	平成21(西暦2009)年6月～7月	東京都千代田区 神田 オルタナティブ スペース KANDADA	アートプロジェクトを考察する展覧会。スタッフ、来場者、アーティストという3つの立場から各地のアートプロジェクトに関わり、多角的な視点から検証することを試みた。筆者はスタッフという立場から、大分県の BEPPU PUROJECT、山口県の秋吉台国際芸術村にそれぞれ2週間滞在し、アーティストきむらとしろうじんじんのプロジェクトへ参画。関係者インタビューやアーカイヴ制作を主に担当した。会場にはインタビューを元にした映像作品上映、レジデンスにて制作した作品展示、アーカイヴ等を展示した。 オープニングトークゲスト：開発好明氏/きむらとしろうじん氏 BEPPU PROJECT 代表 山出淳也氏 主催：東京藝術大学壁画第一研究室 東京都千代田区/オルタナティブスペース KANDADA
COAL PAINT Workshopー石炭・石炭灰えのぐを体験しよう！ー	個人	平成21(西暦2009)年9月	福岡県大牟田市 石炭産業科学館	大牟田市主催の文化事業として、9月と11月に連動企画を実施。9月6日のクリーンコールデーでは、大牟田産の石炭・石炭灰を使ったアートワークショップを石炭産業科学館にて開催。2才～80代までの82名が参加し、石炭に関する関心と理解を深める機会となった。 2009年9月5日、8日 有明新報2件、9月12日日刊大牟田、9月24日読売新聞、10月1日広報おおむた掲載。 主催：石炭産業科学館
福岡県大牟田市文化事業「COAL PAINT Workshop - おおむたの石炭えのぐで炭車を塗ろう！-」	個人	平成21(西暦2009)年11月	福岡県大牟田市 石炭産業科学館	大牟田市主催の文化事業として、行政・企業と連携したワークショップを実施。近代化遺産の一つである、旧三井三池炭鉱の炭車を、子供たちが大牟田の石炭と石炭灰で作った COAL PAINT を使って塗り替え、石炭産業科学館の屋外展示物として常設するものであった。塗装用画材は、筆者がニッカー絵の具株式会社へ協力を依頼し、独自開発となった。炭車は同館の恒久展示物として、現在も展示されている。10月31日西日本新聞、11月2日西日本新聞、11月3日有明新報掲載。 主催：大牟田の「近代化遺産」を活かしたまちづくり実行委員会 開発：ニッカー絵の具
アーティストインレジデンス招聘・個展 「COALITION-石炭を物語るアート-」	個人	平成22(西暦2010)年9月～10月	北海道岩見沢市 NPO 法人そらち 炭鉱の記憶マネジメントセンター	2010年9月中旬より北海道岩見沢市に約1ヶ月間現地滞在し、NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団のマネジメントセンターにて個展。展覧会を触媒に九州と空知地方の旧産炭地間における交流、歴史文化の比較評価、ネットワーク構築を目標とした。公開作品制作、展示、ワークショップ、トークイベントを企画。同時期に開催された岩見沢アートプロジェクト Zaworld II、岩見沢百餅祭り、空知・小樽・室蘭地区連携の「北の近代三都物語」展と関連する形で開催。 2010年9月22日有明新報、 9月23日・30日北海道新聞掲載。 主催：NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団
岩見沢アートプロジェクト Zaworld II 「COAL PAINT Workshop」	個人 (アートプロジェクト参加)	平成22(西暦2010)年9月	北海道岩見沢市 百餅まつり	北海道空知地方の炭鉱遺産の保存活用団体「NPO 法人炭鉱の記憶推進事業団」主催によって、筆者が個展を開催。同時期に、地域の祭りに連動した企画を実施した。北海道の石炭・石炭灰・廃棄物(赤ズリ)を用いたチョークを用いて、参加者同士が向かい合い似顔絵を描き、プレゼントし合うことでコミュニケーションを計るアートワークショップを開催。参加者は幼児から大人までを対象とした。 主催：岩見沢アートホリデイ実行委員会

岩見沢市中心市街地活性化事業まちなかシャッターアート 「Coal miner」	個人	平成 22 (西暦 2010) 年 10 月	北海道岩見沢市 NPO 法人そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター	岩見沢市中心市街地活性化事業の一つ、まちなかシャッターアート事業の依頼により NPO 法人そらち炭鉱の記憶マネジメントセンターのシャッターに石炭灰から作成した塗装絵具「COAL PAINT」を用いて炭鉱に関する絵画を制作。同市内アートセンターIwamizawa 90° (岩見沢キューマル)、北海道教育大学芸術学部学生の協力により完成。 協力：Iwamizawa 90、NPO 法人そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター、北海道教育大学
人力車アートキャラバン「嘉徳劇場 80 周年記念式典」依頼 「伊藤英子夫人画」	個人 (アートプロジェクト参加)	平成 23 (西暦 2011) 年 2 月	福岡県飯塚市 嘉徳劇場	NPO 法人 iArtRevo と嘉徳劇場によって、嘉徳劇場 80 周年記念式典が開催された。田川、飯塚、直方の 3 地域を横断し各商店街空き店舗や屋台などでのアートプロジェクトに参画。嘉徳劇場では、筆者が依頼を受けた伊藤英子夫人画が展示され、セレモニーが行われた。また、会期中筆者はプロジェクトのスタッフとして、他アーティストのイベントサポートやマネジメントに携わった。 2011 年 2 月 7 日西日本新聞掲載。 主催：NPO 法人 iArtRevo
織田広喜美術館 「山本作兵衛原画展」 オープニング企画 「COAL PAINT Workshop—なりきり作兵衛さん！—」	個人	平成 23 (西暦 2011) 年 3 月	福岡県嘉麻市 織田広喜美術館	「山本作兵衛原画展」開催のオープニングワークショップを、児童向けに実施。参加者は 15 名。参加者は、初めに炭坑記録画でユネスコ世界記憶遺産となった山本作兵衛の原画をツアー形式で鑑賞。次に、自らの生活の様子を、石炭を画材とした COAL PAINT を使って、山本作兵衛の画風にならって絵と言葉で描いた。山本作兵衛が、故郷や自分の生活を記録していたことと、自らの生活そのものに価値があり表現する主題となりうることを感じてもらうことを意図した。炭鉱の歴史、山本作兵衛についてのレクチャーを併せて実施した。 2011 年 3 月 20 日 毎日新聞掲載。 主催：織田広喜美術館
個展 「be with underground」	個人	平成 23 (西暦 2011) 年 8 月～9 月	東京都中央区銀座 銀座ギャラリー 女子美	女子美術大学卒業・修士生から選出される新人作家企画展「新しい目」。国内の旧産炭地各所から収集した炭鉱に関連する文化や素材をリソースとして制作。会場では炭鉱住宅の部材を用いた絵画、インスタレーションや COAL PAINT を用いたワークショップ、トークディスカッションを開催。展覧会に関しては、美術評論家 村田真によって ART SCAPE にて批評された。 ART SCAPE: レビュー http://artscape.jp/report/review/10012609_1735.html (2018 年 4 月 21 日確認) 2011 年 8 月 26 日有明新報掲載。 主催：女子美術大学
黄金町バザール 山本作兵衛炭坑記録画原画展 「COAL PAINT Project」	個人 (アートプロジェクト参加)	平成 23 (西暦 2011) 年 10 月～11 月	神奈川県横浜市 黄金町	横浜市中区黄金町のアートプロジェクト「黄金町バザール」にて、ユネスコ世界記憶遺産登録となった山本作兵衛の「炭坑記録画」原画展が開催された。筆者は同展に併せてワークショップや絵画作品の展示を行った。会期中は、来場者に向けた山本作兵衛原画展ツアーを随時行った。また、山本作兵衛原画展に併せて、産炭地にゆかりのあるアーティスト、アートプロデューサーの視点から、作兵衛の作品に対する美術的評価を行うトークを開催。筆者は司会を務めた。トークでは、記録的価値と美術的価値の双方から考察が深められると共に、残存する遺構が極めて少ない筑豊において、記録画がもたらす文化資源としての可能性や、郷土への愛着と誇りの拠り所であることが示された。 パネリスト：山野慎吾氏、母里聖徳氏、菊地拓児氏 主催：黄金町バザール

コバヤシ画廊 個展 「miner's life」	個人	平成 23 (西暦 2011) 年 8 月～ 9 月	東京都中央区銀座 コバヤシ画廊	銀座コバヤシ画廊にて個展。70 年前の炭鉱住宅部材に石炭・石炭灰で描いた作品等を展示。クロージングイベントのトークディスカッションゲストは九州大学大学院教授藤原恵洋氏。炭鉱をテーマにしたアートプロジェクトの変遷を再考察する機会とした。 主催：女子美術大学
第 36 回九州青年 美術公募展 展覧会 「in my home town」	個人	平成 24 (西暦 2012) 年 12 月	福岡県大牟田市 大牟田文化会館	三井三池炭鉱の衰退を契機に、地方美術の振興・普及を図り、新人・青年作家を育てる機会として発足した美術公募展および展覧会に出展。筆者は、かつて同地が栄えた時代に生み出された町のアイコンや視覚デザイン等をモチーフとした絵画レリーフを漆喰・石炭・石炭灰で制作。美術評論家として同展発足に携わった河北倫明にちなんだ賞を受賞。 12 月 3 日有明新報、12 月 4 日日刊大牟田掲載。 審査員：北川フラム、松藤真澄、池末 満、梅崎 弘 主催：大牟田市文化振興財団
「石炭館で炭鉱の ミュージアムスケ ッチをしよう！」	個人	平成 25 (西暦 2013) 年 8 月	福岡県大牟田市 石炭産業科学館	石炭産業科学館にて、2011 年～2013 年にかけて福岡県の助成を受け作成した画材「大牟田のいろクレヨン」を使ったワークショップを開催。5 歳児～40 代の参加者約 15 人と大牟田市石炭産業科学館の展示物を見学し、解説を受けたあと、ミュージアム内でそれぞれが興味関心を持ったものを「大牟田のいろクレヨン」で描いた。制作後は発表会を行い、展示物に対する理解を深めた。 8 月 15 日西日本新聞、8 月 19 日朝日新聞掲載。 主催：NPO 法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ
第 37 回九州青年 美術公募展 展覧会 「都市の鼓動」	個人	平成 25 (西暦 2013) 年 12 月	福岡県大牟田市 大牟田文化会館	2012 年九州青年美術公募展の作品展示を契機に、同会場に集う地域の人々からかつて栄えた地域の記憶等を聞き、集めることが出来た。地域の文脈に基づく現代アートは、領域や世代を超えることが可能となることを体験し、人々から集めた記憶やエピソードを元としたレリーフ作品を連作として制作した。 12 月 3 日有明新報掲載。 審査員：北川フラム、松藤真澄、池末 満、梅崎 弘 主催：大牟田市文化振興財団
直方谷尾美術館 出展 「石炭の時代」展	個人 (展 覧会 出展)	平成 28 (西暦 2016) 年 4 月～ 6 月	福岡県直方市 直方谷尾美術館	福岡県筑豊地区直方市の直方市石炭記念館と、直方谷尾美術館の両館にて、全国最大規模の炭田として発展した筑豊の、石炭産業に関する資格資料や絵画作品展が開催。山本作兵衛はじめ様々な立場から炭鉱を捉えた作品が集約され、展示された。筆者は筑豊地区の田川市に存在した松原炭鉱住宅の廃材をキャンパスとし、石炭・石炭灰で描いた関係者のポートレートを 2 点展示した。 2016 年 4 月 5 日 西日本新聞 2016 年 4 月 7 日 毎日新聞掲載 主催：公益財団法人直方文化青少年協会
第 24 回アジア美 術家連盟展 出展	個人 (展 覧会 出展)	平成 28 (西暦 2016) 年 6 月	福岡県福岡市 福岡アジア美術 館	アジア現代美術の興隆を発展を目的とした国際美術展から発足した同連盟の日本委員会会員による展覧会へ参加。筆者は石炭、石炭灰、漆喰によるレリーフ作品「in my hometown」と「都市の鼓動」を出展。

ワークショップ 「大牟田のいろ」 で 動物を描こう！」	個人	平成 28 (西暦 2016) 年 11 月	福岡県大牟田市 大牟田市動物園	2011 年～2013 年にかけて福岡県の助成を受け、大牟田の炭鉱遺産の色を市民 20 名と共に抽出し作成した画材「大牟田のいろクレヨン」を使ったワークショップを開催。三井三池炭鉱の活況に伴って、1940 年代に開園した大牟田市動物園の歴史を感じながら、動物を地域固有の色でスケッチし、作品化することを目的とした。対象は 2 歳～70 歳までの約 25 人が参加した。 11 月 24 日有明新報掲載。 主催：大牟田市動物園
いわきまちなかア ートフェスティバ ル「玄玄展」 展示 「Coalmine Portrait」	個人 (ア ート フェ ステ ィバ ル参 加)	平成 29 (西暦 2017) 年 10 月 ～11 月	福島県いわき市	NPO 法人 wunder ground による、いわき市内を舞台としたアートフェスティバルに出展。震災を契機に、地域を再考し、コミュニティの創出や固有の文化発信を行うことを目的とした取り組みが行われている。筆者は、常磐炭田の歴史的背景に着目し、炭鉱住宅の廃材を用いた作品「Coalmine Portrait」を 2 点展示。また、いわき炭を用いたワークショップや、炭鉱遺産のまち歩きを開催した。 主催：NPO 法人 wunder ground
平成 29 年度小代 焼窯元の会 需要 開拓事業 展示会「日々の食 卓」～私の宴安～ ワークショップ企 画「小代焼のモザ イクアートづく り」	共同	平成 29 (西暦 2017) 年 10 月	福岡県福岡市	小代焼窯元の会の、展示会に合わせたアートワークショップの企画立案と開催スタッフを務めた。熊本地震からの復興も含め、県北部を中心に生産される小代焼の周知を目的とした。焼き物の破片を各窯元より収集し、モザイクアートの共同制作を行った。参加者は約 30 名。完成した作品は、期間中に会場内にて展示された。
平成 29 年度 文化庁文化芸術創 造活用プラットフ ォーム形成事業 JOBAN ART MINE - アートで掘り出す 黒ダイヤ- 常磐炭田発見隊 -炭鉱のまちを歩 いてみよう-	共同	平成 29 (西暦 2017) 年 11 月	福島県いわき市	内郷・湯本にある炭鉱遺産の保存と活用の可能性を、まち歩きとワークショップを通して、アートの視点も交えつつ再考した。記憶の共有と、場の課題や可能性を探った。筆者は企画立案と、ファシリテーターとして、国内外の産炭地の事例を引き合いに出しつつ、いわきの可能性を探る役割を行った。集約されたアイデアは報告書にまとめ、遺産の保存活用やまちづくり、アートプロジェクトに活かす方向。参加者は 20 名。 主催：いわき潮目文化共創都市づくり実行委員会、NPO 法人 Wunder ground、いわき市
平成 29 年度 文化庁文化芸術創 造活用プラットフ ォーム形成事業 講演 「炭鉱と美術～旧 産炭地における美 術の可能性～」	個人	平成 29 (西暦 2017) 年 11 月	福島県いわき市	常磐炭田は各旧産炭地の中でも最も首都圏に近く、また地元企業を中心であったことから、石炭産業によって振興された美術的風土にも独自性が見受けられる。その独自性を他旧産炭地の事例と比較考察し評価した。また国内外の旧産炭地における芸術文化による都市再生の事例などを、紹介し、分脈や社会性を含む芸術文化活動の意義を述べた。参加者は約 30 名。 主催：いわき潮目文化共創都市づくり実行委員会、NPO 法人 Wunder ground、いわき市

平成 29 年度 文化庁文化芸術創 造活用プラットフ ォーム形成事業 JOBAN ART MINE - アートで掘り出す 黒ダイヤ- COAL PAINTworkshop -いわきとわたし わたしといわき-	個人	平成 29 (西暦 2017) 年 11 月	福島県いわき市	地域や美術に関心のある中高校生や大人を対象に、自らが 住まういわきとの関係性を、ワークショップや作品制作を 通して考え、表現する企画。ディスカッションやワークシ ートを通して、郷土と自身の結びつきを再確認し、いわき 炭から作成した顔料等を使って、自画像を描く企画。 地域の風土、コミュニティ、歴史性と自己が結びつく ことが、表現へと繋がる体験を促すことを目的とした。
九州芸文館 筑後アート往来 2017 「藝術生活宣言 -だって楽しいん だもん!-」	個人 (グ ルー プ展)	平成 30 (西暦 2018) 年 2 月～ 3 月	福岡県筑後市 九州芸文館	学芸員 関岡絵里香氏によって選出された福岡・筑後にゆ かりのある作家の 4 人展。筆者は会場となった筑後船小屋 と、三井三池炭鉱の産業的関係性に着目。筆者は船小屋鉱 泉から作成した顔料を用いた作品「まんまんさま」の制作 と展示、体験型制作の場を設けた。3 月 10 日には、船小 屋のまち歩きを開催。展覧会の様子は新聞記事やテレビ放 送 (TBS) などで取り上げられた。 2 月 13 日 西日本新聞掲載 4 月 15 日 RKB 放送放映「福岡県庁知らせた課」
その他 (表彰等) (表彰) 第36回九州青年美術 公募展 受河北記念 賞「in my hometown」 (絵画)		平成 24 (西暦 2012) 年 12 月		石炭・石炭灰・赤ズリ・漆喰を用いて、福岡県大牟田市に残る地域の様々なアイ コンを再構成した絵画 (レリーフ) 「in my home town」(1550x1350x70mm) が、初代審査員長であった美術史家の河北倫明氏の退任を記念して設立された河 北記念賞を受賞。
第37回九州青年美術 公募展 河北記念賞 受賞 (絵画)		平成 25 (2013) 年 12 月		石炭・石炭灰・赤ズリ・漆喰を用いて、福岡県大牟田市に残る地域の様々なアイ コンを再構成した絵画 (レリーフ) 「都市の鼓動」(1650x1450x70mm)が審査員 特別賞受賞を受賞。
(メディア) ラジオ出演		平成 24 (西暦 2012) 年 11 月～ 平成 28 (西暦 2016) 年 11 月		RKB 放送 「アサヒビール presents 九州の情熱人コーナー」
(作品/活動掲載・引用) 「The day -you are all I need -」		平成 20 (西暦 2008) 年 5 月		『美術手帖 5月号』美術出版社、p.175
「COAL TOUR CAR」		平成 21 (西暦 2009) 年		「Cityscapers cardiff chimera 2020 a porosity studio small city / big nei ghbourhoods」British Council、p.96-97
白川昌生「石炭の記憶 とともに」		平成 22 (西暦 2010) 年 3 月		北九州産業技術保存継承センター、p.79